

COMPOSITION FOR PROPHYLAXIS OR TREATMENT OF ALLERGIC DERMATITIS

特許公報番号 JP2002047193 (A)

公報発行日 2002-02-12

発明者: SUWA ATSUSHI; KAWAI YASUHIRO

出願人 SUNSTAR INC

分類:

一国際: *A23G3/34; A23L1/06; A23L1/30; A23L2/38; A23L2/52; A61K36/18; A61K36/70; A61P17/00; A61P37/08; A23G3/00; A23G3/34; A23L1/06; A23L1/30; A23L2/38; A23L2/52; A61K36/18; A61K36/185; A61P17/00; A61P37/00; A23G3/00; (IPC1-7); A23G3/00; A23L1/06; A23L2/38; A23L2/52; A61K35/78; A23L1/30; A61P17/00; A61P37/08*

一欧州:

出願番号 JP20000230581 20000731

優先権主張番号: JP20000230581 20000731

要約 JP 2002047193 (A)

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain an oral composition or a composition of a preparation for external use used for the purpose of treatment or prevention of relapse of allergic dermatitis, especially treatment or prophylaxis of atopic dermatitis. SOLUTION: This oral composition and a composition of the preparation for external use are characterized as comprising at least one or more species of plants selected from a plant of the genus *Vitis* and *Polygonum cuspidatum* Sieb. et Zucc. or dried substances/extracts thereof and are useful prophylaxis of relapse and symptom alleviating actions on the allergic dermatitis.

esp@cenet データベースから供給されたデータ — Worldwide

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-47193

(P2002-47193A)

(43)公開日 平成14年2月12日 (2002.2.12)

(51)Int.Cl.⁷

A 61 K 35/78

識別記号

F I

テマコト^{*}(参考)

A 61 K 35/78

C 4 B 0 1 4

E 4 B 0 1 7

A 23 L 1/30

A 23 L 1/30

B 4 B 0 1 8

A 61 P 17/00

A 61 P 17/00

4 B 0 4 1

37/08

37/08

4 C 0 8 8

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 8 頁) 最終頁に続く

(21)出願番号

特願2000-230581(P2000-230581)

(71)出願人 000106324

サンスター株式会社

大阪府高槻市朝日町3番1号

(22)出願日

平成12年7月31日 (2000.7.31)

(72)発明者 諸訪 淳

大阪府箕面市粟生間谷西2-6-12-403

(72)発明者 川井 康弘

滋賀県大津市大平2-15-4

Fターム(参考) 4B014 GB08 GG18 GK06

4B017 LC03 LG15

4B018 MD48 MD52 ME07

4B041 LC10 LD02 LK29

4C088 AB43 AB56 AC02 AC04 AC05

AC11 AC13 MA52 MA63 NA14

ZA89 ZB13

(54)【発明の名称】 アレルギー性皮膚炎予防または治療用組成物

(57)【要約】

【課題】 アレルギー性皮膚炎の治療や再発防止、特にアトピー性皮膚炎の治療または予防の目的で用いる経口組成物や外用剤組成物を提供する。

【解決手段】 ブドウ属植物 (Vitis) およびイタドリから選ばれる少なくとも1種以上の植物やその乾燥物／抽出物を含有する事を特徴とする、アレルギー性皮膚炎の再発予防及び症状緩和作用に有用な経口組成物および外用剤組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 ブドウ属植物 (Vitis) およびイタドリ科植物から選ばれる少なくとも1種以上を含有することを特徴とするアレルギー性皮膚炎の予防や症状緩和に有用な経口組成物。

【請求項2】 ブドウ属植物 (Vitis) およびイタドリ科植物から選ばれる少なくとも1種以上を含有することを特徴とするアレルギー性皮膚炎の再発予防や症状緩和に有用な外用剤組成物。

【請求項3】 アレルギー性皮膚炎がアトピー性皮膚炎である請求項1または2記載の組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、本発明はアレルギー性皮膚炎による皮膚損傷部位や外因的な治癒部分に対して、副作用のない優れた症状緩和作用または再発予防作用を有する組成物に関する。更に詳しくは、ブドウ属植物 (Vitis) およびイタドリ科植物から選ばれる少なくとも1種以上の植物やその乾燥物／抽出物を含有することを特徴とするアレルギー性皮膚炎の再発予防及び症状緩和作用を有する経口組成物および外用剤組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】 近年、アレルギー性皮膚炎に悩む人が増加しており、その中でもアトピー性皮膚炎に悩む人は急激な増加を示している。従来、アトピー性皮膚炎患者のほとんどは乳幼児期に発症し、思春期にかけて完治する人が多く、一部の患者は20歳を超えても軽快しない成人型の難治性アトピー性皮膚炎として残ると言われてきたが、最近では成人してから初めて発症する患者も増え続けており、累積の患者数は飛躍的に引き上げている。また、アトピー性皮膚炎に至らないまでも皮膚感受性の高くなっている人々が増加しており、接触性皮膚炎のようなアレルギー性皮膚炎患者の増加要因の一つにもなっているとも考えられている。

【0003】 このような患者数の急激な増加の理由として、「住環境やオフィス環境の変化に伴う気密性の大幅な向上、それに伴う長時間の乾燥やアレルゲン物質への曝露。」「大気汚染（酸化窒素、酸化硫黄、煤塵）の悪化に伴う免疫系への負担の増加。」「外食や加工食品の利用の増加などといった食生活の乱れから生じる摂取栄養素の偏りや各種化学物質の長期間の摂取。」など種々挙げられているが、アレルギー性皮膚炎、特にアトピー性皮膚炎の発症の原因や病態の解明が進んでおらず、未だに不明な点が多いため、医学的には根本的な治療を行なう事が出来ない状況にある。一方、年々増加する医療費の削減が日本の国家行政の大きな課題点になりつつある点を考慮すると、アレルギー性皮膚炎、特にアトピー性皮膚炎を根本的に治療する方策や発症を予防する方策を早急に見出す必要がある。

10

20

30

40

50

【0004】 このような現状に対して、医療現場では、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状の悪化の阻止や一時的な治癒をする目的で「ステロイド外用剤、非ステロイド系消炎外用剤等の外用製剤の使用」、「抗アレルギー剤、抗ヒスタミン剤、漢方製剤、ステロイド剤、抗生素質、等の内服」、特異的／非特異的減感作療法、細菌ワクチン療法、薬浴療法、PUVA療法、スキンケア、生活環境の改善、アレルゲン除去食療法など種々の試みがなされている。しかし、これらの治療をもってしても、異常のない皮膚状態まで改善させ、一見して疾病が治癒したように見せる事は出来ても短期間のうちに症状が再発する場合が多い事が知られている。最近、完全な皮膚機能にまで改善させるためには、外観的な皮膚症状が完治した時点から、さらに数年は必要であるとの報告もある。もし、皮膚機能が完全に回復するまで、治療や発症予防を投薬などの医療行為で行なうことは、治療費が嵩んだり、長期間の投薬による副作用のリスクが大きい（例えばステロイド外用剤は、長期間の投与による副腎皮質機能不全、発育障害、毛細血管の拡張を伴う紅斑、皮膚萎縮、感染症の誘発・増悪等の副作用の問題があり）などの大きな課題が存在している。

【0005】 一方、食生活の改善指導に関しては、特定の成分がアレルゲンになっている場合にはその成分を除去した食事を摂取すれば良い事になるが、実際には多数の要因が絡み合って発症している場合が多いため、食改善を実施しても全く効果を得られない場合が多いだけでなく、栄養摂取の偏りから、体調を崩す場合も考えられる。また、ある程度の改善効果が期待できる場合においても、長年の習慣を改善しつゝ長期間実行していく事が難しく実行出来ない場合が多かったり、会社員など外食をする機会の多い人については食改善の実行自身が困難であるという課題が存在している。

【0006】 このような事情から、アレルギー性皮膚炎、特にアトピー性皮膚炎の治療にあたっては、対症療法としての外用剤投与を機軸に種々の補助療法を組み合わせてできる限りマイルドな方法で皮膚炎の悪化と反復を抑制しながら自然軽快へと導くのが治療の基本であると考えられている。そのため、アレルギー性皮膚炎による皮膚損傷部位に対して優れた治癒促進作用や生体のアレルギー反応自体の抑制効果を有する副作用のない組成物の開発が望まれていた。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】 従って、本発明は、根本解決が困難であるアレルギー性皮膚炎に対して優れた再発予防効果や治癒促進作用を有する副作用のない経口組成物または外用剤組成物を提供することを目的とする。

【0008】

【課題を解決するための手段】 本発明者らは、植物成分に含まれる生理活性物質について鋭意検討を重ねた結果

果、驚くべきことに、ブドウ属植物やイタドリ科植物を継続的に摂取した場合、アレルギー性皮膚炎、特にアトピー性皮膚炎の発症予防または症状緩和が期待できることを見出し、本発明を完成するに至った。

【0009】本発明はかかる知見に基づき完成されたものであり、この解決手段のメリットとしては、「食経験のある素材を活用するため、長期間摂取しても副作用が出にくい」、「食生活の補完的存在でもあり、手軽に摂取できるため、食生活の改善が困難な場合に特に有効である」、「他の生理活性機能の改善効果が期待できる成分も同時に摂取出来る」などが挙げられる。

【0010】

【発明の実施の形態】本発明に用いられるブドウ属植物 (*Vitis*) は特に限定されるものではないが、欧、中東品種のビニフェラ種(*V.vinifera*)やシルベルトリス種 (*V.silvestris*)。北米品種のラブルスカ種 (*V.labrusca*)、カリフォルニア種 (*V. califonia*)、エースティバリスト種 (*V.aestivalis*)、マンソニアーナ種 (*V. mansoniana*)、リンケクミー種 (*V. lincecumii*)、ブルピナ種 (*V. vulpina*)、カンディカンス種 (*V. candicans*)、コーディフォリア種 (*V. cordifolia*) に代表される約 30 品種。アジア品種のアミュレンシス (*V. amurensis*)、ヤマブドウ (*V. coignetiae*)、チョウセンヤマブドウ (*V. amurensis*)、エビズル (*V. thunbergii*)、サンカクズル (*V. flexuosa*) に代表される真ブドウ亜属 (*Euvitis*) 及びムソニヤナ種 (*V. munsoniana*)、ロトンディフォリア種 (*V. rotundifolia*) の擬ブドウ亜属 (*Muscadinia*) が挙げられる。これらのうち、真ブドウ亜属 (*Euvitis*) に属する品種とロトンディフォリア種 (*V. rotundifolia*)、ビニフェラ種(*V.vinifera*)、ラブルスカ種 (*V.labrusca*)、およびそれらを主体として日本で育種された品種が好ましい。

【0011】さらに具体的に言えば、ロトンディフォリア種 (*V. rotundifolia*) としては、カルロス (*Carlos*)、コバルト (*Cowart*)、ドリーン (*Doreen*)、フライ (*Fry*)、ヒギンス (*Higgins*)、ハント (*Hunt*)、ジャンボ (*Jumbo*)、マグノリア (*Magnolia*)、ノーブル (*Noble*)、スカッパノング (*Scuppernong*)、ステアリング (*Sterling*)、シュガーゲイト (*Sugargate*)、サミット (*Summit*)、タイール (*Tarheel*)、ウォーターゲイト (*Watergate*) などが例示でき、ビニフェラ種(*V.vinifera*)としては、イーレン (*Airen*)、アリゴーテ (*Aligote*)、リースリング (*Riesling*)、ソーヴィニオンブラン (*Sauvignon blanc*)、トレッビアーノ (*Trebbiano*)、シャルドネ (*Chardonnay*)、シナンブラン (*Chenin blanc*)、セミヨン (*Semillon*)、ミュスカ (*Muscat*)、カベルネソービニオン (*Cabernet Sauvignon*)、カリニャン (*Carignan*)、サンソー (*Cinsault*)、グルナッシュノワール (*Grenache Noir*)、メルロ

(*Merlot*)、マタロ (*Mataro*)、ピノノワール (*Pinot Noir*)、サンジョヴェーゼ (*Sangiovese*)、シラー (*Syrah*)、ガメイ (*Gamay*)、テンプラニーリョ (*Tempranillo*)、ゲヴェルツトラミネル (*Gewurztraminer*)、ネッビオーロ (*Nebbiolo*)、ツバイゲルトレーベ (*Zweigeltrebe*)、ミュラー トゥルガウ (*Muller-Thurgau*)、グロロー (*Grolleau*)、カベルネフラン (*Cabernet Franc*)、プチベルド (*Petit Verdot*) などが挙げられる。

【0012】また、ビスティス ラブルスカ種 (*V.labrusca*) としては、ジンファンデル (*Zinfandel*)、ロトンディフォリア種 (*V. rotundifolia*) としては、カルロス (*Carlos*)、コバルト (*Cowart*)、ドリーン (*Doreen*)、フライ (*Fry*)、ヒギンス (*Higgins*)、ハント (*Hunt*)、ジャンボ (*Jumbo*)、マグノリア (*Magnolia*)、ノーブル (*Noble*)、スカッパノング (*Scuppernong*)、ステアリング (*Sterling*)、シュガーゲイト (*Sugargate*)、サミット (*Summit*)、タイール (*Tarheel*)、ウォーターゲイト (*Watergate*) が例示できる。

【0013】日本で開発された品種としては、具体的には、アジロンダック、安芸クイーン、イタリア、伊豆錦、オリンピア、大平デラ、甲斐路、カベルネサントリー、ガーネット、巨峰、キャンベルアーリー、キングデラ、グローコールマン、コンコード、甲州、甲州三尺、サントリーブラン、サントリーノワール、高尾、デラウェラ、ナイヤガラ、ネオマスカット、ハニーシードレス、ハニーレッド、ピオーネ、ヒロハンブルグ、ビオヴェルド、ブラッククイーン、ブラックハンブルグ、ブライトン、笛吹、藤稔、北光、紅瑞宝、紅やまびこ、マスカットハンブルグ、マスカットビオレー、マスカットオブアレキサンドリア、マスカットベリーA、ヤマブドウ、リースリングリオン、リザマート、ルビーオクヤマ、竜宝、レッドクイーン、レッドパール、ロザリオビアンコなどが挙げられる。

【0014】特に好ましいブドウは、ビニフェラ種(*V.vinifera*)のリースリング (*Riesling*)、ソーヴィニオンブラン (*Sauvignon blanc*)、トレッビアーノ (*Trebbiano*)、シャルドネ (*Chardonnay*)、カベルネソービニオン (*Cabernet Sauvignon*)、カリニャン (*Carignan*)、メルロ (*Merlot*)、ピノノワール (*Pinot Noir*)、シラー (*Syrah*)、ガメイ (*Gamay*) カベルネフラン (*Cabernet Franc*)。ビスティスラブルスカ種 (*V.labrusca*) のジンファンデル (*Zinfandel*)。及び日本で開発された品種の甲斐路、カベルネサントリー、巨峰、キャンベルアーリー、甲州、サントリーブラン、サントリーノワール、高尾、デラウェラ、ネオマスカット、ピオーネ、ヒロハンブルグ、ビオヴェルド、ブラックハンブルグ、笛吹、藤稔、紅瑞宝、紅やまびこ、マスカットベリーA、竜宝、レッドクイーンが好ましく、リースリング (*Riesling*)、ソーヴィニオンブラン (*Sauvignon Blanc*)、シャルドネ (*Chardonnay*)、カベルネソービニオン (*Cabernet Sauvignon*)、カリニャン (*Carignan*)、サンソー (*Cinsault*)、グランナッシュノワール (*Grenache Noir*)、メルロ

bernet Sauvignon) メルロ (Merlot) 、ピノノワール (Pinot Noir) カベルネフラン (Cabernet Franc) 巨峰、コンコード、キャンベルアーリー、デラウェラ、ピオーネ、甲州、ネオマスカット、マスカットオブアレキサンドリア、グローコールマン、ヤマブドウが最も好ましい。

【0015】これらブドウの使用部位は、特に限定されるものではないが、葉または果実（果皮、種子を含む）が好ましく、特に、葉が最も好ましい。

【0016】本発明に用いられるイタドリは、タデ科植物に属する多年草であり、イタドリ、オオイタドリ、メイゲツソウ、オノエイタドリなどが挙げられ、イタドリが好ましい。タデ科植物の使用部位は、特に限定されるものではないが、地上部分または根、根茎が好ましく、更に、根、根茎が最も好ましい。上記に挙げた植物はそのままの状態か、切斷、破碎、天然乾燥、熱風乾燥、凍結乾燥、醸酵の加工を行なったものを使用したり、更に常法に従って、抽出、濃縮、粉末化、顆粒化などの処理を行なって得られたものも使用できる。

【0017】抽出は、有機溶媒や水を用いた抽出法、臨界抽出法などの一般的な抽出方法により行なう事が出来る。このような方法としては、例えば、特開昭61-171427号公報に記載されたような方法が挙げられる。抽出溶媒としては極性溶媒が好ましく、さらにはアルコール類や水、液化炭酸ガスが好ましく、最も好ましくは、エチルアルコール、水、液化炭酸ガスが挙げられる。

【0018】本発明組成物における上記植物の配合量は、本発明では、所期の効果が得られれば特に限定されるものではなく、組成物の形態、加工、濃縮処理の程度に応じて適宜設定できる。例えば、経口組成物の場合、固形分換算で0.0001～10重量%、0.001～1重量%が好ましく、特に0.005～0.5重量%が好ましい。

【0019】外用剤組成物の場合、固形分換算で0.01～10重量%、0.01～5重量%が好ましく、特に0.05～5重量%が好ましい。これら範囲は嗜好性や効果、経時安定性などの点から選択される。

【0020】本発明の経口組成物は、例えば、錠剤状、塊状、液状、シロップ状、カプセル状、顆粒状、粉末状ゼリー状、ペースト状などの各種形態に、常法に従って調製する事ができる。かかる形態の具体的な例としては、清涼飲料水、果汁飲料、乳飲料、茶類などの飲料（ドリンク剤）；粉末ジュース、粉末スープ、などの粉末飲料；クッキー、ビスケット、チュアブル錠剤、チューイングガム、キャンディー、グミ、ウェハース、せんべいなどの菓子類；ドレッシング、ソース、スプレッド、ふりかけ、粉末調味料などの調味料；パン、麺類、餅、シリアル、オートミールなどの主食系製品；病者用食品、特定保健用食品、栄養補助食品などの機能性食品などが挙げられる。また、本発明組成物は、任意の食品

を調製するために使用する事の出来る食品素材（例えば食品添加剤など）として用いる事もできる。

【0021】本発明組成物の投与量および摂取量については、その形態、患者または摂取者の年齢、性別、その他の条件、疾患の程度により適宜設定される。また、経口組成物においては、特有の収斂味を抑制するためには、蛋白質や蛋白質加水分解物を共存させることが好ましく、特に牛乳や乳製品に混合したり、乳性蛋白質やコラーゲン加水分解物を添加することが好ましい。

【0022】本発明組成物は、アレルギー性皮膚炎の治療や再発防止の目的で、1日に1回または数回に分けて投与または摂取する事ができる。特に、アトピー性皮膚炎の再発予防や治療の目的で使用すると効果的である。

【0023】本発明組成物を外用剤として使用する場合には、例えば、錠剤状、カプセル状、塊状、液状、粉末状、ゼリー状、ペースト状などの各種形態に、常法に従って調製する事ができる。かかる形態の具体的な例としては、栄養クリーム、保湿クリーム、乳液、ミスト、化粧水、美容液、スキンローション、クレンジング（クリーム状、ジェル状）、紫外線防御化粧品、洗顔剤（クリーム状、ジェル状、粉末状）、ボディーパウダー、ボディーシャンプー、石鹼、ボディーリンス、シャンプー、リンス、トリートメント、ヘアトニック、育毛剤、スカルプローション、浴用剤、ハンドソープ、ハンドクリーム、貼布剤、リップクリーム、口紅、制汗剤などが挙げられる。また、エアゾール形態にしたり、ウェットティッシュやコットン、オムツなどに含浸させたりして使用することもできる。

【0024】本発明組成物には、本発明の効果を損なわない範囲であれば、必要に応じて、通常、医薬品や化粧品、食品に用いられる成分、例えば、他の薬効成分、微量栄養素（ビタミン、ミネラル、食物繊維など）、動植物成分（乳関連成分、油脂類、ワックス類、多糖類、アミノ酸や蛋白質加水分解ペプチドおよびそのエステル誘導体、ポリフェノール類（配糖体も含む）、リン脂質類、搾汁液、溶媒抽出物など）、アニオン界面活性剤、ノニオン界面活性剤、カチオン界面活性剤、両性界面活性剤、アルコール類（低級アルコール、高級アルコール、多価アルコール、およびそれらのエステル誘導体など）、有機および無機酸およびその塩類、高分子（寒天、タマリンドガム、キサンタンガム、ペクチン、ゼラチン、アルギン酸ナトリウム、澱粉などの天然系高分子；カチオン化セルロース、メチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、ヒロドキシエチルセルロース、ヒドロキシプロピルメチルセルロース、カチオン化澱粉、カチオン化コラーゲン、カチオン化キサンタンガムなどの半合成高分子；ポリエチレンイミン、ポリエチレンジリコール、アクリル系高分子、ビニル系高分子、メタクリル系高分子などの合成高分子）賦形剤、增量剤、酸化防止剤、紫外線吸収剤、紫外線散乱剤、甘味料、香味

剤、着色剤、着香料、防腐剤などが配合できる。

【0025】

【実施例】以下、実施例および実験例に基づいて本発明をより詳しく説明するが、本発明はこれらの例に限定されるものではない。なお、配合量の数値は、特に記載しない限りは「重量%」を意味する。

【0026】実験1 ヒスタミン遊離抑制作用

I型アレルギー反応では感作された肥満細胞あるいは好塩基球からヒスタミンなどのケミカルメディエーターが遊離することが知られている。従って、これらのヒスタミン遊離反応を抑制する物質は抗アレルギー作用が期待できる。本試験では、ヒト好塩基球株細胞（KU812細胞）を用いたヒスタミン遊離抑制作用を測定した。

【0027】（試験方法）KU812細胞は10%牛胎児血清を含むRPMI1640培地（GIBCOBR L）で37℃、5%CO₂下で培養した。細胞はヒスタミン遊離緩衝液（*1）を添加し、1500rpm、4℃、5分の遠心処理後、上清除去、2回洗浄の後、10⁵cel 1s/m1にヒスタミン遊離緩衝液で調製した。細胞懸濁液100μlとヒスタミン遊離緩衝液で調製した0.01%、0.05%のイタドリ抽出物（*2）または1.0%ヒスタミン遊離抑制率（%） = $\frac{(100 - (A - B))}{(C - B)} \times 100$; 式(1)

【0030】式中〔被検物質のヒスタミン量（A）：被検物質とCRA-1を加えた細胞から遊離するヒスタミン量（nM），ネガティブコントロールのヒスタミン量（B）：無処置細胞から遊離するヒスタミン量（nM），ポジティブコントロールのヒスタミン量（C）：※

	イタドリ抽出物	グリチルリチン酸ジカリウム
濃度（%）	0.01	0.05
遊離抑制率（%）	50±5	76±3

【0032】表1に示された結果から、イタドリ抽出物はグリチルリチン酸ジカリウムに比べ著しく優れた遊離抑制作用を有する事が確認された。

【0033】実施例1：糖衣錠

下記の処方により、常法に従って糖衣錠剤を調製した。

成分	配合量（%）
澱粉	60.0
粉末還元麦芽糖水飴	20.0
乳糖	15.0
イタドリ抽出物（*2）	5.0
合計	100.0

得られた糖衣錠剤はアトピー性皮膚炎の皮膚症状の緩和、予防のために投与または摂取できる。

【0034】実施例2：飲料添加用剤

下記の処方により各成分を混合して、常法に従って飲料添加用剤を調製した。

成分	配合量（%）
ブドウ果皮抽出濃縮液（*4）	50.0
エチルアルコール	20.0

* %グリチルリチン酸ジカリウムを100μlを、1.5m1エッペンドルフチューブにとり氷冷下で30分放置した。その後、1500rpm、4℃、5分の遠心処理し、上清除去して得られた細胞を、ヒスタミン遊離緩衝液200μlで再度混合し、1mg/m1の高親和性IgE受容体抗体（CRA-1、極東製薬（株））3μlを添加後、37℃30分間インキュベートした。測定は、2000rpm、4℃、10分の遠心処理の上清をヒスタミンEIAキット（IM-MUNOTECH）で行なった。

10 【0028】（計算方法）検量線より算出したヒスタミンから以下の式（1）に基づいてヒスタミン遊離抑制率（%）を求めた。測定は、n=5で行い、平均値と標準偏差を表した。結果を表1に示した。

*1: 30 mM Tris-HCl (pH 7.6)、120 mM NaCl、5 mM KCl、1 mM CaCl₂、1 mM MgCl₂、0.03% BSA

*2: イタドリ（Polygonum cuspidatum Sieb. et Zucc.）の根を含む根茎を乾燥させ粉碎したものに、水／エタノール=30/70（容量比）を加え攪拌抽出した後に粉末化したもの。

20 【0029】

【式1】

$$\text{ヒスタミン遊離抑制率（%）} = \frac{100 - (A - B)}{(C - B)} \times 100 ; \text{式(1)}$$

※ CRA-1のみを加えた細胞から遊離するヒスタミン量（nM）を示す。

【0031】

【表1】

マルチトース	15.0
異性化糖液糖（果糖分50%）	10.0
アスコルビン酸	5.0
防腐剤	微量
合計	100.0

*4: 巨峰の果実を圧搾したものを80~90℃の熱水にて循環抽出し、得られた抽出液をBrix値が10付近に達するまで真空加熱濃縮させる。濃縮後、冷却濾過する。（固形分 9%）

得られた飲料添加用剤は、例えばアレルギー性皮膚炎の症状緩和や再発防止の目的で使用される飲料の製造や用時調製剤として使用する事が出来る。用事調製剤として使用する場合には、水や果汁飲料などの飲料と任意の割合で混合させて飲用に用いる。混合の比率は任意ではあるが、混合させる飲料に対して重量比で5~10%程度が適当である。

50 【0035】実施例3：飲料

下記の製造方法により各成分を混合して、常法に従って飲料を調製した。即ち、25%脱脂粉乳溶液に乳酸菌（S

treptococcus lactis) のスターを接種し、pH約4になるまで培養してヨーグルト様の組成物を得た後に、均質化する。次いで、砂糖5部、リンゴ果汁10部、ペクチン30部を水に溶解し調製した甘味添加剤を、均質化したヨーグルト様組成物に重量比で4:5の割合で加え混合する。更に、グルコン酸カルシウムとグルコン酸マグネシウムを重量比で2:1に混合したものを10部を水に溶解したものを20重量%の割合で加え混合した後に、最後にブドウ葉抽出液(固形分約10%)を10重量%添加して得られる。得られた飲料は、アレルギー性皮膚炎の治療および再発予防できる。

【0036】実施例4: 貼布剤

下記の処方により各成分を混合して、常法に従って貼布剤を調製した。

成分	配合量 (%)
ポリビニルアルコール	20.0
白色ワセリン	10.0
エチルアルコール	5.0
カルボキシメチルセルロースナトリウム	5.0
イタドリ抽出物(*2)	3.0
トリメチルグリシン	3.0
1-メントール	1.0
精製水	残部
合計	100.0

得られた貼布剤は、アトピー性皮膚炎の皮膚症状の緩和や再発防止に使用できる。

【0037】実施例5: 軟膏

下記の処方により各成分を混合して、常法に従って軟膏を調製した。

成分	配合量 (%)
白色ワセリン	30.0
グリセリン	20.0
スクワラン	10.0
セチルアルコール	5.0
マグネシウムステアレート	3.0
1-メントール	1.0
ブドウ葉抽出物(*5)	0.05
精製水	残部
合計	100.0

*5: Pinot Noirの乾燥葉を浴比1:10(乾燥葉:エタノール)にて5時間、ゆっくりと攪拌しながら浸漬抽出し、得られた抽出液を減圧乾固させ、粉末化処理を行って得られる。

得られた軟膏は、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状の緩和や再発防止に使用できる。

【0038】実施例6: ローション

下記の処方により各成分を混合して、常法に従ってローションを調製した。

成分	配合量 (%)
イタドリ抽出物(*6)	20.0

10	イソブレンジリコール	5.0
	グリチルリチン酸ジカリウム	0.2
	ヒドロキシプロピルメチルセルロース	0.1
	メチルパラベン	0.05
	1-メントール	0.03
	精製水	残部
	合計	100.0

*6: イタドリ (*Polygonum cuspidatum* Sieb. et Zucc.) の根を含む根茎を乾燥させ粉碎したものに、重量換算で40倍の水を加え、60~80℃の範囲に液温を保ちながら3時間攪拌抽出した後に冷却ろ過し、減圧濃縮装置で約2倍に濃縮して得る。(固形分約9%)
得られたローションは、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状の緩和や再発防止に使用できる。

【0039】実施例7: 乳液

下記の処方により各成分を混合して、常法に従って乳液を調製した。

成分	配合量 (%)
プロピレンジリコール	5.0
20 グリチルレチン酸ステアリル	2.5
スクワラン	2.0
クエン酸ナトリウム	2.0
セチルアルコール	1.5
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油	1.0
1-メントール	1.0
ポリオキシエチレン	0.5
ソルビタンモノステアレート	
カルボキシメチルセルロース	0.2
メチルパラベン	0.05
30 イタドリ抽出物(*2)	0.01
精製水	残部
合計	100.0

得られた乳液は、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状の緩和や再発防止に使用する事が出来る。

【0040】実施例8: シャンプー

下記の処方により各成分を混合して、常法に従ってシャンプーを調製した。

成分	配合量 (%)
ポリオキシエチレン(3)	10.0
40 ラウリルエーテル硫酸ナトリウム	
ポリオキシエチレン(3)	10.0
ラウリルスルホコハク酸ナトリウム	
オオイタドリ抽出液(*7)	10.0
ヤシ油脂肪酸ジメチルプロピル	5.0
アミノ酢酸ベタイン	
やし油脂肪酸ジエタノールアミド	3.5
プロピレンジリコール	3.0
カチオン化セルロース	0.5
1-メントール	0.5
50 安息香酸ナトリウム	0.5

11

香料、色素	適量
精製水	残部
合計	100.0
* 7 : オオイタドリ (<i>Polygonum sachalinens</i>) の根茎および根を乾燥させ粉碎したものに、水／エタノール=30／70 (容量比) を加え攪拌抽出したもの。(固形分3%)	

得られたシャンプーは、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状の再発防止に使用できる。

【0041】実施例9：トリートメント

下記の処方により各成分を混合して、常法に従ってトリートメントを調製した。

成分	配合量 (%)
塩化ステアリルトリメチルアンモニウム	5.0
塩化ジステアリルジメチルアンモニウム	2.0
オオイタドリ抽出液 (* 7)	100.0
セタノール	3.0
プロピレングリコール	4.0
ジメチルポリシロキサン (20cs)	4.0
ジメチルポリシロキサン (100万cs)	2.0
ステアリルアルコール	1.0
パルミチン酸イソプロピル	0.5
メチルパラベン	0.3
香料、色素、紫外線吸収剤	適量
精製水	残部
合計	100.0

得られたトリートメントは、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状を防止できる。

【0042】実施例8：ボディーリンス

下記の処方により各成分を混合して、常法に従ってボディーリンスを調製した。

成分	配合量 (%)
イソブレンジリコール	30.0
スクワレン	20.0
オオイタドリ抽出液 (* 8)	10.0
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油	5.0
デカメチルシクロペンタシロキサン	3.0
ジメチルポリシロキサン (100万cs)	2.0
1-メントール	0.5
安息香酸ナトリウム	0.5
精製水	残部
合計	100.0

* 8 : オオイタドリ (*Polygonum sachalinens*) の葉部を乾燥させ粉碎したものに、水／エタノール=50／50 (容量比) を浴比1：5 (乾燥葉：抽出溶媒) にて加え、12時間攪拌抽出したもの。(固形分4%)

得られたボディーリンスは、アレルギー性皮膚炎の皮膚症

12

状の症状緩和や再発防止に使用できる。

【0043】実施例8：浴用剤

下記の処方により各成分を混合して、常法に従って浴用剤を調製した。

成分	配合量 (%)
炭酸水素ナトリウム	60.0
無水硫酸ナトリウム	32.0
ホウ砂	3.0
イタドリ抽出物 (* 2)	1.0
1-メントール	0.1
合計	100.0

得られた浴用剤は、アレルギー性皮膚炎の皮膚症状の症状緩和や再発防止に使用できる。

【0044】実施例9：病者用食品

下記の処方により各成分を混合して、常法に従って病者用食品を調製した。

成分	配合量 (%)
水飴	40.0
砂糖	13.0
イタドリ抽出物 (* 2)	4.0
防腐剤、酸味料	適量
合計	100.0

得られた病者用食品剤は、アトピー性皮膚炎の皮膚症状の症状緩和や再発防止に使用できる。

【0045】実施例10：ゼリー状食品

下記の処方により各成分を混合して、常法に従ってゼリー状食品を調製した。

成分	配合量 (%)
ブドウ果皮抽出濃縮液 (* 4)	30.0
ブドウ濃縮還元果汁	10.0
砂糖	8.0
カラギーナン	1.5
クエン酸	0.1
ブドウフレーバー	0.03
精製水	残部
合計	100.0

得られたゼリー状食品は、アトピー性皮膚炎の皮膚症状の症状緩和や再発防止に使用するできる。

【0046】

【発明の効果】ブドウ属植物 (*Vitis*) およびイタドリやその乾燥物／抽出物にはアレルギー性皮膚炎の再発予防効果や治療効果を有しているので、これらを含有する経口組成物は、病者用食品、特定保健用食品、栄養補助食品などの機能性食品としても摂取する事が出来る。また外用剤組成物は、アレルギー性皮膚炎、特にアトピー性皮膚炎の治療や再発予防に有用である。

フロントページの続き

(51) Int. Cl.	識別記号	F I	マークコード(参考)
// A 23 G 3/00	101	A 23 G 3/00	101
A 23 L 1/06		A 23 L 1/06	
2/52		2/38	C
2/38		2/00	F